HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	境界なき空間 : 時代的事象としてのボロジノ
Author(s)	木村, 崇
Citation	境界研究, 2, 1-29
Issue Date	2011-11-25
DOI	https://doi.org/10.14943/jbr.2.1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61270
Type	departmental bulletin paper
File Information	01Kimura.pdf, 本文

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『境界研究』No.2（2011）pp.1-29

境界なき空間

― 時代的事象としてのボロジノ ―

木村　崇

はじめに

現代の世界地図をみると、地球上の陸地はことごとく国境線で区分されている。海岸線のある国には領海もあるから、境界は海の部分にもはみでているわけだ。さらに排他的経済水域というあたらしい境界も出現した。飛行機は領空と空域を無視して飛行することはできないので、空中にも3次元の境界がある。これがもっと進めば宇宙空間や地中にまで境界は設定されるのではないか。いや、筆者が知らないだけで、もしかしたらすでに存在するかも知れない。

一方、動物や植物の世界にはそれぞれ生存に適した環境があって、うまく棲み分けられてきた。グラデーションがあるにせよ、そこには境目と呼んでよいものができている。気候や気象の分野にも、やはり自然の境目ができている。しかしこれらも含めて「境界」と呼ぶなら議論が拡散してしまうおそれがある。本論考でいう「境界」とは、人間が行う集団的社会的活動の結果として作られた、人間特有のものを指している。自然界に、人間の側からの介入とは無関係にできている「境目」と、もっぱら人間が自分の都合で自然界に線引きしてできた「境界」とは区別して考えたい。

境界は、すぐれて人間的な営為の所産である以上、時の流れとともに変化する存在である。川島真は王朝国家時代の中国の人口希薄な境界領域について、「境界線は双方にとって曖昧であり、まさに『疆域』と言えるようなグレーゾーンが存在した」と指摘する。川島によれば「そのような境界は多くの場合開かれており、周辺諸族も、華人も移動できた」とのことだ(1)。同様のグレーゾーンは一時期日本とロシアの間にも存在した。1855年に調印された日魯通好条約第2条には、「『カラフト』島に至りては日本国と魯西亜国の間に於いて界を分たす、是迄仕来の通りたるへし」とある(2)。

今日、このような「グレーゾーン」や「界を分かたぬ」場所は、公海と南極大陸以外には存在しない。しかし歴史をさかのぼると、19世紀の初頭ですら人跡未踏の地はいく

(1) 川島真「近現代中国における国境の記憶:『本来の中国の領域』をめぐる」『境界研究』1号、2010年、4頁。
(2) 日本国外務省、ロシア連邦外務省「日露間領土問題の歴史に関する共同作成資料集」1992年、7頁 [http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/hoppo/1992.pdf] (2011年7月1日閲覧).

らでも存在した。とうぜんそこには「境界」などあろうはずがない。やがて人間の足が踏み入れられると「疆域」とか、サハリンのように「異国籍民および先住民が共住する地」といった、境界のあいまいな場所が現れる。地球上のある地域では明確に区分された境界が存在する一方、いまだその段階に至っていない広大な地域が同時に存在する時代は、ボーダー研究においては区別して考察される必要があるだろう。この時代には、現在の境界概念では読み解きにくい問題があるのではないかと思うからである。

沖縄の南・北大東島は、1820年8月、付近を航行中の露米会社所属の帆船によって発見され、艦長のポナフィヂン(Zakhar Ivanovich Ponafidin)によって「ボロジノ諸島(ostrova Borodinskie)」と命名された。このことは同時代に数多くなされた新島発見のひとつに過ぎないが、その状況と顛末をつまびらかにすることにより、その時代における境界なき空間での人間たちの営為の一般的な特徴を抽出することが可能だと考える。出来事そのものはこれまで、ロシア海軍の世界周航をあつかった文献や露米会社史の研究のなかで指摘されてきた。しかしこの出来事に関連する一次史料に可能な限りあたり、「境界研究」の一環としてこれを総括するような研究はいまだなされていない(3)。本論考の目的はこの未決の課題を解明することにある。

1. 露米会社とロシア艦船の世界周航

境界のない空間が地球上に広く分布していた時期の大きな特徴は、すでに境界によって(戦争の結果次第という流動性をはらんでいるにせよ)区割りされた「先進」諸国の空間から、いまだ境界の曖昧な、あるいは未画定の空間への人的流入が活発化することである。15世紀以前の、たとえばイブン・バトゥータとかマルコ・ポーロの旅行は未知の異文明に対する畏敬といった内発的動機に触発された側面がまさっていた。しかし15世紀から16世紀に移るあたりを境に状況は一変する。この頃のコロンブスやバスコ・ダ・ガマの遠征は、国益追求という露骨な欲望を背景としている。やがて重商主義時代ともなると、この傾向はいっそう歴然とした性格を帯びる。17世紀初頭からはイギリス、オランダ、フランスなどが相次いで東インド会社の活動を開始する。彼らの活動の対象となった地域は、おおむね境界のない、あるいは曖昧な空間であった。この状態は19世紀半ばから、場所によっては世紀末まで続くと見てよいだろう。

露米会社の場合、なみはずれた海運力・海軍力を背景に権益域を広げた英国やオランダの東インド会社とは大きく異なる。その前身は、陸路伝いに高価値毛皮動物の捕

(3) 本論考で取り上げる史料や文献以外にも、ウェブ上ではこれについての様々な情報を確認することが出来る。しかしいずれも典拠があいまいなので、あえて取り上げなかった。ポナフィヂン艦長の航海とボロジノ諸島発見について公刊されたもっともはやい時代の文献としては、*Ивашинцов Н.А.* Русские кругосветные путешествия с 1803 по 1849 год. СПб., 1872の第12章をあげることができる。

獲とその交易による利潤を追い求め、いつしかベーリング海峡まで越えてしまったイルクーツクの毛皮商たちである。18世紀末になるとその権益域がアラスカやアレウト諸島にまでおよんで手に負えぬほど拡大してしまった結果、自国の海軍を頼りにせざるを得なくなったというのが実態である。ロシア政府にとっても高価値毛皮から上がる莫大な収入は魅力だった。しかし当時ロシアの海運業は未発達で、民間のロシア船舶が七つの海を縦横に航行していた、という状況はまったくなかった。唯一たよりになるのはロシア海軍の軍艦だけである。それでも、19世紀ごくはじめに、帆船を操って日本を訪れたレザーノフ(Nikolai Petrovich Rezanov)がロシア初の世界周航を成し遂げたことでもわかるように、その頃ロシアの海軍力は遠洋航海先進国と呼んでよい水準には達していた。

ここで奇妙な現象が生まれる。武家の商法ならぬ、海軍軍人身分の海運業者があらわれ、露米会社の経営に全面的にたずさわることになったのである。露米会社は帝政ロシア政府との契約で、定款と特権の有効期限を20年として1799年7月8日(現行暦換算では19日、以下、角括弧[ ]内は現行暦日付もしくは筆者注)に設立されたため、1819年夏にはその期限が切れることとなった(4)。時の政府はこの契約を更新しないこととし、経営者の交替を断行した。露米会社は、イルクーツクの商人であったグリゴリイ・シェーリホフ(Grigorii Ivanovich Shchelikhov)の毛皮交易会社がその前身である。やがて彼はアレクサンドル・バラーノフ(Aleksandr Andreevich Baranov)という商才に長けた男をアラスカの現地で雇い入れたおかげで、シェーリホフが1795年に亡くなった後も、会社は経営を規模拡大させ業績を伸ばしていた。シェーリホフの娘婿であった上述の遣日使節レザーノフが1806年、42歳で病没するまで総支配人の職責をはたしてはいたが、初期露米会社の経営は、事実上バラーノフの辣腕が存分に支配した20年間であったといえよう。

新しい最高経営責任者となったのは、海軍中佐のレオンチイ・ガゲメイステル(Leontii Andreevich Gagemeister)という人物である。「1818年1月11[23]日、38歳のガゲメイステルが(自分の誕生日の数日前)高齢のバラーノフにとって代わった。初代社長更迭の辞令を交付しておきながら、露米会社の重役会はのちに、ガゲメイステルがバラーノフと共同か、でなければすくなくとも相談しながら経営に当たるようになるのが望ましいと決議したが、時すでに遅しであった」(5)。3巻からなる『ロシア領アメリカの歴史、1736-1867』という本の、この部分を担当した論文著者は、「バラーノフ更迭は

(4) *Болховитинов Н.Н.* Русская Америка на рубуже 20-х гг. XIX в. (принятие новых правил и привилегий РАК) // История Русской Америки 1732-1867. Т. II, Деятельность Росийско-американской компании 1799-1825. М., 1999. С. 303.

(5) *Петров А.Ю.* Морские офицеры начинают управлять русскими коллониями в Северной Америке (1818-1825) // там же. С. 340.

露米会社にたいする政府の態度が変化した結果であった」とし、「実態として露米会社は18世紀末のそれとはすっかり様変わりしていた。会社の設立期には経済的課題が第一に掲げられ、それに付随するかたちで経済的課題に一定の政治的色彩が付与されていたのに対して、1818年ともなると、露米会社の活動の第一位には政治問題が浮上していた」(6)と述べている。また「政府からのいかなる命令をもためらわずに遂行できるためには、アメリカにおけるロシア植民地の長たるものは軍人でなければならない」という理由で社長になったガゲメイステルは、さらに海軍軍人たちを露米会社の要職につけたという(7)。バラーノフの時代でさえ先住民との衝突や慢性的食糧不足など、問題が山積していて事態収拾に難儀していたのに、ガゲメイステルの経済的合理性を欠いた経営方法は露米会社の業績悪化にいっそう拍車をかけてしまった。ロシア海軍の海図部の歴史をまとめたある本は、「1818年以降、[露米]会社の重役に指名されたのは海軍軍人のみで、1840年までに商人たちは重役会から完全に姿を消し、会社は商事企業からアラスカ管理の政府組織に変貌してしまった」とさえ断言している(8)。

しかし、首都サンクト・ペテルブルク近くにある海軍基地クロンシュタート(Kronshtadt)の港から積み込んだ、あるいは途中寄港した土地で購入した食料や船舶修理などの必要な資材を露米会社の本拠地ノヴォ・アルハンゲリスク(アラスカ西南端のバラーノフ島にある現シトカ市)(Novoarkhangel'sk)まで届け、帰る船で毛皮を世界の市場に運ぶという任務は継続しなければならない。ロシア海軍は、先に遠洋にのりだしていた他の大国と比べて汽走スクリュー船化が遅れていた。1852年10月プチャーチン(Evfimii Vasil'evich Putiatin)が日本に派遣された際、随行艦となったヴォストーク号(Vostok)が最初の汽走スクリュー船で、19世紀半ばまではすべて帆船が使用されていた。

クロンシュタートからノヴォ・アルハンゲリスクまで航行するには、大西洋を南下し、アフリカ大陸西岸の港かリオデジャネイロに寄港した後、喜望峰の沖合で航路を変えインド洋へ出る「東回り」と、南米大陸南端のホーン岬から太平洋に出る「西回り」とがあった。また東回りあるいは西回りで地球を完全に一周する場合と、復路も往きの航路をたどる半周航とがあった。前者の場合はかならず二つの岬付近を通過することになる。ホーン岬付近は強い西風が吹く季節になると、帆船にとって操船は困難をきわめ、遭難があいついだという。だが、1803年のナジェージダ号(Nad'ezhda)による世界周航から1866年のギリャーク号(Giliak)まで、ロシア艦船による世界周航は28回、半周航は15回を数えるが、うち東回りの世界周航16回、西回りの世界周航12回、東回りの半周航7回、西回りの半周航7

(6) Там же. С. 342.
(7) Там же.
(8) История гидрографической службы Российского флота (К 300-летию создания Военно-морского флота). Т. I. СПБ., 1991. С. 277.

回と、ほぼ拮抗している[9]。したがってどのコースをとるかは、その時々の気象、気候、潮流その他の複雑な航海上の条件を考慮して決められたものと思われる。

この世界周航に使用された船舶は、露米会社所有のものとロシア海軍の軍艦とがあった。経営陣が入れ替わった1818年以前では、完全周航6回、半周航3回が記録されているが、うちロシア海軍の軍艦によるものは2回のみで、あとの7回はすべて露米会社の船である。しかし所有主がだれであったかにかかわらず艦長はすべてロシア帝国海軍の佐官であり、乗組員も大半は海軍の士官、下士官、水兵からなっていた。1818年以後は海軍に所属する軍艦の比率が34回中25回と圧倒的に増える。しかし主な任務が貨物輸送である点については、一貫して変わらない。ただし次章で述べるように、すべての航海において緯度・経度、水深、潮流、風向、気候、気象はもちろん海岸や島のプロフィール描写など、水路図作成や航行の安全に関わるような情報を集めるための観測は義務づけられていたと思われる。海洋地理学的調査を主たる目的として世界周航におもむいた艦船も1818年以前には2度ばかりあった[10]。

1818年以降はそのような目的を主としたものは見られないが、この時期の海洋空間には、まだまだ大きな空白の部分が残っていた。帆船は、どうしても「風まかせ」の航路を取らざるをえない。好天時でもせいぜい前後左右40キロメートルくらいしか目視できなかったであろう。巨大な大洋に幅80キロメートルの線を何度描いてみたところで、とうてい大洋を覆い尽くすことなど不可能である。それだけに、現存する海図や先人の航海記に載っていない島を発見したときなど、航海者たちの興奮は、今日のわれわれには想像もできないほど大きかったであろう。

2. ボロジノ号艦長ポナフィヂンによる新島発見

1819年9月28日[10月10日]、ボロジノ号という露米会社所有の大型帆船がクロンシュタート港から出帆した。この航海について伝える、露米会社の株主総会に対する1819年10月21日[11月2日]という日付のある報告文書がモスクワの帝政ロシア外交文書館(АВПРИ)に保管されている。この報告の第二項に次のような記載がある。

> 第二に、わが社がイギリスで購入しボロジノ号と命名いたしましたもう一隻[同じくイギリス製で、1816-18年に世界周航を成し遂げたクトゥーゾフ号(Kutuzov)とは別の]、すなわちカシワ材で建造された頑丈で非の打ちどころのない、600トンをはるかに超える排水量と搭載砲20門、乗員総数112名という信頼度抜群の船が、去る9月28日[10月10日]、クロンシュタート港から上記の植民地[アメリカにある露米会社の支配地]へ向け、ポナフィ

(9) これは同書に載っている年表「19世紀におけるロシア帆船の世界周航」をもとに計算したものである。汽走船ヴォストーク号はなぜかこの数には入っていない。Там же. С. 284-289.

(10) Там же.

ギン氏、つまりスヴォーロフ号(Suvorov)を指揮して困難な往復航海[西回りの半周航]を成功させたまさにあの人物を艦長として無事出発しました。彼には豊富な経験があり、補佐する海軍士官や官費雇用の乗組員をともなっておりますので、幸運な航海成就への期待は裏切られることはないでしょう。この船でわれわれが輸送するものは、植民地での殖産興業や交易活動を維持するための、また人々を扶養するための、約80万ルーブル相当の様々なロシア製の物資や資材、原材料であります(11)。

木造の帆船で何万マイルも外洋を航行するためにはかなりの排水量を持つ大型船でなければならない。しかしどれほど堅牢な船舶であっても、激しい風と波に翻弄され、ときには浅瀬に座礁したりすることもあるわけだから、寄港するたびに修理が必要となる。航海の途中で必要物資の買い足しとか、船舶の本格的な修理ができる港はどこにでもあるわけではない。そのうえ乗務員の健康管理問題がたえずつきまとう。東回りにせよ西回りにせよ、いよいよインド洋や太平洋に乗り出す前に装備の総点検をする場所としてリオデジャネイロ港が多く利用されたのは、それなりの必然性があったのであろう。株主総会にむけた1820年6月[何日かは解読困難]付けの報告文書でも、目下ボロジノ号の航行が順調に行われていること、無事リオデジャネイロに到着したことなどを伝えている。

下記署名人たちは、1819年9月28日[10月10日]、私どもの植民地へ向けクロンシュタートから出発いたしました艦船ボロジノ号が、コペンハーゲンを出て56日間の航海の末、12月10［22]日ブラジルのリオデジャネイロ港に無事着きましたことを、謹んでお知らせいたします。同船の士官および乗組員は健康で意気軒昂であります。現地での小休止時、われらの航海旅行者たちはしばらくの間新鮮な食料品、砂糖、ラム酒等の新たな備蓄を確保し、総額3万6,720ルーブル相当のロシア製品数品目を売却して2,355ルーブル7コペイカの利益を得た後、目的地に向けて出発いたします(12)。

このボロジノ号は、復路でもふたたびリオデジャネイロ港に入ることになる。この時艦長のポナフィヂンは、60年間で計43回にのぼるロシア船の世界周航と半周航のうち、最大数となる悲惨な犠牲者を出したことを報告しなければならなくなるという、自らの悲劇的な運命を知るよしもなかった。帝政ロシア外交文書館では今日でも、全乗員122名の名簿を目にすることができる。まず艦長のザハル・ポナフィヂンの名があり、脇に年俸1万ルーブルと書かれている。ついで副艦長格と思われるピョートル・チスチャコフ(Petr Chistiakov)とフセヴォロド・ポナフィヂン(Vsevolod Ponafidin)（年俸各5,500ルーブル)、その下に航海士のドミトリー・ニホルフスキイ(Dmitrii Nikholvskii)ともう1名(各5,000ルーブル)の名が続く。2枚の紙の表裏に書かれた名簿には、さらに残り117名のそれぞれの任務と姓名が延々と書き連ねられている(13)。そのうち無事故郷の地を踏むことができたの

(11) АВПРИ (Архив внешней политики Российской империи), ф. РАК, оп. 888, д. 292, л. 1-1об.
(12) АВПРИ, ф. РАК, оп. 888, д. 292, л. 2.
(13) АВПРИ, ф. РАК, оп. 888, д. 292, л. 3-4об.

は3分の2弱の88名にすぎなかった。復路に再度寄港したリオデジャネイロからポナフィヂンが、艦長名ではなく、ボロジノ号のコミッショナー、すなわち「仲買人」の立場から、露米会社重役会宛に送った報告書があるが、1821年9月12［24］日に受理された［発信日付の記載なし］とされるこの報告書には、航海中34名が死亡、また病気にかかった40名がなんとか命を取りとめ、回復しつつあると書かれている。資料集『露米会社と1816−1841年の太平洋北部の研究』の脚注は「おそらく熱帯性赤痢よるものだろう」と推定している(14)。しかしポナフィヂンの報告書には、「副領事イリューヒン氏(Iliukhin, 名・父称は不詳)を通じて旧暦5月23日［6月4日］付けで、われらの船がリオデジャネイロに到着したことを謹んでお知らせいたしました。航海中に生じた不幸のため34名の死者を出し、また港に到着後40名の病人については神のご加護のおかげで回復しつつあります」とあるだけで、死因についての記載はない。後半部には、船の修理を2週間で終えて出帆できる見通しだとか、運搬してきた鉄鉱石等の売却状況、ブラジル製品の価格評価、ノヴォ・アルハンゲリスクから運んできた貨物のことなどが淡々と綴られている(15)。

実は同じ日付で受理された文書がもう一通ある。宛名の欄に、海軍局所属の上官たちとおぼしき名を3名連記にした、公文書というよりは私信にちかい手紙である。3名とも苗字を省き、名と父称のみの、親密感のある敬意をこめた呼称表現であることからして、名宛人3名はごく近しい上司か同僚であろう。リオデジャネイロから1821年7月［文字不鮮明で、6月かもしれない］14［26］日に発信されたものである。封筒には入れず、便箋を折りたたんで綴じ目を封蝋で封緘し、反対側に宛名書きがしてある。正式の公文書なら、きちんと封筒に入れたうえで送付するはずである。かなり癖のある直筆文なので解読は困難を極める。名宛人3名の名・父称を連記し、おなじ方法で封緘された手紙はほかにも2通あるが、やはりよほど慣れたものでなければ解読することはできないであろう。問題の3通目は、1821年1月31日［2月12日］、ノヴォ・アルハンゲリスクを出港し113日間の航海の後、5月21日［6月2日］にリオデジャネイロに着いたこと、航海は幾多の困難に遭遇はしたが、もしも犠牲者が出ていなければ「順調であった」といってもよかろうに、という記述に続けて、「乗務員のうち下士官1名、海兵17名、［解読困難］1名」と死亡者の内訳らしいものの記述がなんとか読み取れる(16)。その後には、［往路の］マニラで発病者が出たらしいこと、困難にどう対処したかが書いてあるらしいのだが、残念ながらそれ以上詳しいことは読み取ることができない。

さて、話をもとに戻そう。往路のボロジノ号は1820年2月7［19］日リオデジャネイロを

(14) Российско-Американская компания и изучение тихоокеанского севера, 1815-1841. Сборник документов. М., 2005. С. 105.
(15) АВПРИ, ф. РАК. оп. 888, д. 292, л. 15.
(16) АВПРИ, ф. РАК. оп. 888, д. 292, л. 9.

後にすると、3年前のスヴォーロフ号とは逆に東回りの航路をとった。喜望峰を左舷に見て、インド洋に入り順調に航行を続け、5月10[22]日にはジャワ島北西岸の港に投錨することができた。ついで、リオデジャネイロと並んでよくロシア艦が寄港するフィリピンのマニラ港に達する。7月31日[8月12日]のことである。クロンシュタートを出てからまる10ヶ月が経ったことになる。どうやらここで一部の乗組員が伝染病に罹患したらしい。ボロジノ号は1820年8月3[15]日、ノヴォ・アルハンゲリスクを目指して一路北東方向に太平洋を横断する長距離航海を開始した。あたりまえだがこのときポナフィヂン艦長はもちろん乗務員もだれひとり、未発見の島との運命的出会いが待ち受けていると予見したものはいなかった。遠洋航海とは、うんざりするほど来る日も来る日も水平線の上と下しか見えない、隔絶された空間の旅である。

そこに突然、どの国の海図にも載っていない、著名な航海士の誰一人も見たことのない異様な形をした島が、しかも仲よくふたつならんで眼前に現れたのである。ポナフィヂン艦長の新島発見報告には、公文書にはめずらしい興奮が感じられる。この報告書は、なんとか目的地にたどり着いてかなり日の経った、1821年1月26日[2月7日]にノヴォ・アルハンゲリスク停泊中のボロジノ号から露米会社重役会に提出されたものである。こちらは直筆だが読みやすい筆跡である。

> マニラから米国北西海岸へ向けて航行する途中、私たちは二つの発見をすることになりました。
>
> 昨年の8月20日[9月1日]、穏やかな北西風のもと、早暁まもない、水平線にまだほの暗さが残るころ、推定12ないし15イタリア・マイル[12 〜 15km][(17)]先の真北方向に、低い砂地の島が発見されました。その西から東までの幅はおよそ10マイルでした。風向きがよかったので、近づいてみることにしました。島の緯度は、数台の調整済みの機器を用いて正午の太陽の高さを艦の天測位置から測定し、経度の計測には、マニラ滞在時に精度点検をして今日まで機器相互間の算定の作動差がほんの数秒しかないものを用いました。前者は北緯25度50分14秒、後者はグリニッジを起点として東経131度11分39秒という結果でした[(18)]。
>
> 午後になって間もなく、同じ風のもとで島にそって航行を続けていたところ、そこから北北東方向に、最初のものによく似た島がもう一つ、12マイルほどの位置関係で姿を見せました。両島間は海面がおだやかなところから、海峡の水深は深いものと判断します。
>
> 本船の本来の使命とは異なりますし、その時はこれらの島からほとんど真向かいに吹いてくる風も弱く、島の形そのものからして航海者にはなんら有益なものはもたらしそうも

(17) イタリア・マイルとは別名ミリオ(miglio)ともいい、伝統的には1.489km、現在では1kmにあたる。普通の1国際海里(international nautical mile)は1.852km。

(18)『南大東村誌』では、北緯25度56分、東経131度15分としており、ポナフィヂンの測定値とは若干の差がある。同村誌は島の中央部の正確な測定値を採用している。南大東村誌編集委員会編『南大東村誌』改訂版、1990年、65頁。

なかったため、付近に留まることはいたしませんでした。測定は正確に、完全かつ成功裏になされたはずであると思いましたので、見るからに不毛と断定してよい砂状の丘陵や岬を、これらの島に近寄ってスケッチするために航行を遅らせたところで、また水を確保できない島だと判断できることもあって、なんら益するところはないと考えました。それらの島の方位測定をした際、2度にわたり船から100サージェン[19]の段索に繋いだ鉛錘を投げ入れましたが海底には達せず、コンパスの[磁場]偏角は両島から1度28分東寄りであると算定されました。新旧いずれの地図にも、またこの経度の海域を通過した著名な航海者たちの航海記にも、このあたりには岸らしきものは毫も見いだせないので、これらの島はみな、あえて我ら自身の発見に帰してよいと考え、したがってこれらの島を艦名に因んでボロジノ諸島と命名いたしました[20]。

これは那覇の360キロメートル東方に位置する北大東島と南大東島である。これらの島に人が住むようになったのは、この発見から数えて80年も後のことであった。明治政府は1885年、二島を日本領として宣言し琉球処分後に置かれた沖縄県に編入した。しかしその後もながらく無人島の状態が続いていたわけである。ポナフィヂン艦長が「水も確保できそうになく、航海者にはなんら有益なものはもたらしそうもない」としたのはあながち拙速な判断ではなかったということであろう。ボロジノ号はこの4日後、さらにもうひとつ未知の島を発見する。報告書の後半部に彼はボロジノ諸島と同じく、この島についてその形状の特徴と測量した結果を詳しく記録している。

本船は全聖人島(Todos los Santos)と聖フォマー島(S. Tomas)の中間点を目指してまっすぐ東北東にむかう航路を継続しました。それはこれらの島が私の手元にあるアロースミス氏(Arrowsmith)の海図やスペインの海図に記されており、どちらもその位置が一致しておりますので、それらの間に何らかの発見があるかもしれないという目論見があってのことです。

8月24日[9月5日]10時、上述いたしました島々の、一方よりは北、他方よりは南の中間にさしかかったとき、艦の船首の真正面に三つの高い丘のある島が見えました。正午にそれと同じ緯度線に並びましたが、その緯度は北緯30度29分、経度は東経140度6分30秒でした。

この発見によって全聖人島と聖フォマー島の存在意義が損なわれることのないよう、またおのれの栄誉心におもねることなく、さらには航海者たちが気づきやすいよう、私はこの島を三丘島(ostrov Tr'okh Kholmov)と名付けました。本文書に添付いたしました島の図[21]を御覧になればこれが、海鳥が羽を休めるためにしか益のない断崖絶壁以上の何ものでもなく、この近辺の海上を航行する者にはこう命名したことによって、わかりやすい目印と

(19) 帝政ロシアの長さの単位で、1サージェンは2.134メートル。

(20) АВПРИ, ф. РАК, оп. 888, д. 292, л. 17-18. ここに訳した「ボロジノ諸島」は、現在のロシア海図では «о-ва Бородино» となっているが、ポナフィヂンの自筆テクストでは «Острова Бородинские» と、「ボロジノ」が形容詞になっている。

(21) 図は現存しない。

なるであろうことがおわかりいただけるでしょう。終日晴天が続き、上檣横木に上ってみたのですが、岸辺らしきものは一切見えず、絶壁があるだけでした。島から6マイルも離れていないのに100サージェンある段索でも海底には届きませんでした。そこでのコンパスの偏角は東0度55分と算出されました。

10月1[13]日私たちは待ちに待ったトゥルビーツィン岬、別名エチクム(Trubitsyn, Echkum)を目にすることができました。私たちの計算と測定された場所とは3マイルの差もありませんでした。クロノメータがこれほど正確であるからには、ボロジノ諸島と三丘島の測定が疑いもなく正確であることを、きっと皆様方に確信していただけるものと思う次第です。

10日間も嵐とどんよりした天気が続きましたので、ノヴォ・アルハンゲリスクの停泊地へ入ることができず、11[23]日になってようやく同地に投錨することとなりました。私たちの努力にもかかわらず、また港湾側の懸命な活動にもかかわらず、わたしにはその日より以前に、クロンシュタートへ帰るため艦の準備を整えることはとうてい無理でした。艦の規模からして石のバラストは2万プードほど必要なのですが、私はそれだけの石を集めるのにたいへん苦労いたしました。

南西モンスーンの季節に私たちがマニラに滞在したとき、同地で私たちにとって不利な取引がなされたことのほかに、わが乗務員の健康にかかわる深い禍根を残してしまいました。わたしたちがマニラに着いた日からこの日までに全乗組員中19名を、うち14名は第一線の海員ですが、失ってしまいました。死にいたった病因は皆共通していて、下痢と、全員ではないのですが血便でした。

3ヶ月半以上続いたわたしたちのノヴォ・アルハンゲリスク港滞在中、総支配人と地元の医師の側から施していただいたあらゆる処置にもかかわらず、この病を完全に撲滅する力はありませんでした。

私の思いは、もし神のご加護があるものなら、どこへも寄港することなくまっすぐリオデジャネイロへ行き、そこで休息をとって、できるならコペンハーゲンか、あるいはじかにクロンシュタートへ航行したいということです。

いと高き衷心からの敬意を抱きつつ、謹んで皆様方のもっとも忠実なるしもべとさせていただきます(22)。

この報告書はよほどの価値があったのであろう。ポナフィヂン艦長による3つの新島発見情報は、さらに第3者の手でまとめられ、イギリス経由の至急便で1821年9月13[25]日に海軍局[1827年に海軍省に改組・昇格]に届けられている(23)。三丘島らしき島については、ポナフィヂンの2年後にもうひとりの発見者が現れた。ポヴァリーシン艦長(N. V. Povalishin)という人物で、カムチャツカ州長官リコルド海軍大佐(Petr Ivanovich Rikord)にあてて彼が新島発見報告を提出したのは1822年6月30日[7月11日]である(24)。ただ、ポナフィヂンが三丘島と名付けたものとは緯度・経度に若干の違いがあった。海軍局会議が、

(22) АВПРИ, ф. РАК, оп. 888, д. 292, л. 18-19об.
(23) АВПРИ, ф. РАК, оп. 888, д. 292, л. 5-6об.
(24) РГАВМФ (Российский государственный архив военно-морского флота), ф. 215, оп. 1, д. 787, л. 3-4.

これはポナフィヂンの上述の報告にある島と、緯度、経度の差がわずかであることからして同一の島ではないかとの疑問をはさみ、関係機関に確認を命じたのは1822年12月1[13]日のことである[25]。これら一連の文書類は現在、サンクト・ペテルブルクのロシア国立海軍省文書館(РГАВМФ)に保管されている。

ボロジノ諸島についても、確認が必要と考えた人物がいた。海図局を司るサルィチェフ海軍中将(Gavriil Andreevich Sarychev)である。前述の海軍局会議決定の6年後の1828年に、6月19[22]日付けで輸送船クロトキー号(Krotkii)の船長、海軍中佐ガゲメイステルに指令書をだす。ガゲメイステルとは前章で述べたあの露米会社の2代目社長である。サルィチェフの指令は、太平洋を航行する際にはできるだけ最短距離の航路をとって時間の浪費を避けようとしながら、しかし同時に、それまでに伝えられている水路情報を可能なかぎり調査するようにと要請している。その第一にあげているのがポナフィヂンの発見したボロジノ諸島なのである。指令書は細かな具体的指示で満ちあふれている。サルィチェフというのは実務肌の専門家であることが、この指令書からも読み取れる[26]。さて、新発見の三島は、いつどのようにして認知されたのであろうか。

3. 太平洋の新情報を反映した二つのアトラス

ポナフィヂン艦長が三丘島と命名した島とポヴァリーシン艦長が見つけたという島が同じだと分かったのはいつなのかは、それを検証した記録が存在するかどうかも含め、今のところ残念ながら筆者にはわからない。一方、ガゲメイステル艦長の指揮の下、カムチャツカにあるペトロパヴロフスク港(Petropavlovsk)への東回り世界周航の旅に出た露米会社所有の三本マスト輸送船クロトキー号については、寄港先から毎回海軍省大臣ミーレル宛てに送付された艦長の報告書が現存する。

それによればクロトキー号は、1828年9月8[20]日にクロンシュタート港から出帆している[27]。同月16[28]日にはコペンハーゲンに無事着き、病人は出ていないことなどの報告を送ると、同月21日[10月3日]、ふたたびコペンハーゲンを発ち、10月1[13]日に[イギリスの]ポーツマスへ入港したことがわかる。10月15[27]日にポーツマスをあとにしたクロトキー号は、大西洋を一路南下する。この時の長い航海では様々な出来事や目撃情報があったので、「昨日7時にセマン湾に投錨」と書かれている1829年1月14[26]日の報告は、途中経過を細かい点までじつに丁寧に書き留めている[28]。しかし本論考の目的からはそれるので、それらについての考察は割愛する。

そののちペトロパヴロフスクへ到着するまでにガゲメイステルによって書き継がれる

(25) РГАВМФ, ф. 215, оп. 1, д. 787, л. 5-7.
(26) РГАВМФ, ф. 402, оп. 1, д. 88, л. 21-24.
(27) РГАВМФ, ф. 402, оп. 1, д. 88, л. 29.
(28) РГАВМФ, ф. 402, оп. 1, д. 88, л. 30-34.

報告書には、寄港地の物価状況とか商取引上の提言などが書かれている1829年1月26日［2月7日］付けのシモン湾から送られたもののように、それ自体としては重要なものがあるが(29)、サルィチェフから託されたボロジノ諸島の再確認に関する情報はどこにも記載されていない。往路の航海でガゲメイステルが、近年発見報告のあった新島について再確認ができた島としてあげているのは、1829年6月3［15］日の発見とされるメンシコフ公爵諸島(ostrova kniazia Menshchikova)とトリアシュヤ島(ostrov Toliasiuia)およびエシガリツ島(ostrov Eshgal'ts)［いずれも現在名不詳］である。彼はそれを特筆したある報告書で、それらの位置が発見報告通りであったことを伝えている(30)。この報告がサンクト・ペテルブルクに伝わると、海図作成の最高責任者であるサルィチェフ海軍中将は、部下にあたる海図工廠長にあてて1830年7月9日［21日］付けで次のような指令書を送付している。

皇帝陛下直属海軍参謀本部海図工廠長殿

ここに、海軍中佐ガゲメイステルが全権を託された三本マスト艦クロトキー号によるジャクソン港(Zhakson)からカムチャツカに至る航海に関する彼の報告の写し、ならびにガゲメイステル本人によって再発見されたメンシコフ公爵諸島の測量結果を記載した航海日誌および日誌に添付されているそれらの島々の地図を添え、またさらに同様のもの二点、すなわちトリアシュヤ島とコツェブ艦長(Otto Evstaf'evich Kotsebu)が1825年に発見したエシガリツ島の測量結果とを閣下の机下に送付いたしますので、地図及び航海日誌をご確認のうえ、今後閣下の裁量にゆだねられる全体水路図作成に際し記載方よろしくお願い申し上げます(31)。

新島の再確認かどうかは分からないがこの報告とは別に、その一月前の1829年5月5［17］日から6月はじめまでの間に、ジャクソン港出港ののちカムチャツカへ向かう途中で目撃した多数の島々の緯度と経度を書いた報告も伝わっている(32)。しかしその中にもやはりあのボロジノ諸島はないのである。

さて、帰路についたガゲメイステルは、カムチャツカを発つと太平洋を一気に南下し、ホーン岬を回って大西洋に出て、リオデジャネイロに到着する。この航路の途中で目撃したこととか数多くの島々や湾の測量と描写、気象や海流、風向きなど、水路情報に関するあらゆる観測および測量結果についての詳細な報告がある(33)。しかしこれは帰路の記録であって、当然ながらボロジノ諸島には関係がないのである。

ボロジノ諸島の位置が正しいかどうかを確かめてほしいと、サルィチェフが出した指令書の発行日付は1828年6月である。指令を受けたガゲメイステルがクロンシュタートに戻

(29) РГАВМФ, ф. 402, оп. 1, д. 88, л. 35-36.
(30) РГАВМФ, ф. 402, оп. 1, д. 88, л. 43.
(31) РГАВМФ, ф. 402, оп. 1, д. 88, л. 49.
(32) РГАВМФ, ф. 402, оп. 1, д. 88, л. 44-46.
(33) РГАВМФ, ф. 402, оп. 1, д. 88, л. 55-62об.

るのは1830年9月なので、ロシア海軍作成の海図にボロジノ諸島が記載された時期は1830年代もしくは40年代ではないかと考えるのが妥当であろう。海図工廠長に宛てた公文書が示すサルィチェフの慎重な手順からみて、新島発見情報をそのまますぐに新しい海図に載せるとは考えにくい。再調査の時間と海図の作成にかかる時間を考えると、どんなに早くとも30年代半ばより以前ではない。しかも、1853年6月にはペリーの艦隊が小笠原諸島から那覇へ帰る途中、艦上から最新の海図を元に南ボロジノ島を確認したというから(34)、どんなに遅くとも40年代の終わりまでにはロシア製の海図にボロジノ諸島の名前が印刷されているはずである。しかし、確実だと思われたこの読みは、おって述べるように、見事にはずれることとなった。

現在ロシアで販売されている地図では、たとえば1963年6月21日発行(1993年再版)のソ連製海図のような本格的なものだと、「ボロジノ諸島(日本) (о-ва Бородино (Яп.), o-va Borodino (Iap.))」と表記され、各島には「南大東島(o. Минамидайто, o. Minamidaito)」や「北大東島(o. Китадайто, o. Kitadaito)」といったキリル文字に翻字された日本名が並記されている。これは20万分の1という、サトウキビ運搬の線路や飛行場[現在は廃止、移転]、港湾、大小の池などまではっきりわかる精密な海図である。一方、縮尺1：25,000,000の、一枚ものの世界地図(地図発行所 DMB 社製のロシア語版)では反対に、総称を「大東諸島(o-ва Дайто, o-va Daito)」と、日本名をそのままキリル文字で表記し、それに属する島々として「ボロジノ諸島(о-ва Бородино, o-va Borodino)」と「沖大東島(o. Окидайто, o. Okidaito)」とが記載されている。普通サイズの世界地図帳などの場合はロシア名だけで「ボロジノ諸島(о-ва Бородино, o-va Borodino)」と書かれるケースが多い。1993年発行の『南大東村誌』が「英国海軍水路誌や欧米製諸地図には、すべて南・北大東島はボロジノ諸島(Borodino Islands)」と記載されているとしているところから見て、おそらく欧米諸国の地図でも「ボロジノ諸島」の名称が広く流布していたのであろう(35)。だからこそこれらの典拠になった地図がかならずロシア国立海軍文書館には存在しなければならない。

そこで、1830年から1850年までの太平洋の北半球に関係する地図類をすべて調べることにした。万が一を考えて、20年代に発行されたものからも該当しそうなファイル(delo)を選んだ。ファイルといってもこの場合は地図帳まるまる1冊を指す。この時代に刊行された世界地図は超大型判のアトラスとしてまとめられたものが多く、閲覧室の机は小さすぎて作業机でなければ開けられないほどである。発行年の早いものから順にアトラスを調べた。最初に「ボロジノ諸島(O-va Borodinskie)」という表記の記載されたものは『東大洋[太平洋]北部のアトラス(Atlas severnoi chasti Vostochnogo okeana)』だった(図1参照)(36)。この

(34)『南大東村誌』(前注18参照)、65頁。
(35) 同書、64–65頁。ただし、Times社製世界地図(1999年刊第10版)には “Islands Daito” と記載されている。
(36) РГАВМФ, ф. 1331, оп. 4, д. 716, л. 2.

アトラス作成作業の初期段階では、小笠原諸島の北にある「鳥島」が、ポナフィヂンとポヴァリーシンがそれぞれ発見した別個の島として隣接して書かれていた。それが海軍局会議で問題となり、1822年12月1［13］日付で再確認が必要だという、例の決定がなされたのである。あれから4年経って完成版として発行されたわけである。問題となったポナフィヂン発見の第3の島は「三丘島」としてひとつだけ描かれている。結局彼の発見者としてのプライオリティーが認められ、ポヴァリーシンの発見は2番目とされたということであろう。

表紙をめくると、遊び紙に見事な書法で「1826年5月13［25］日海軍局製図部受理」と書かれ、次のタイトルページには下段に「サルィチェフ海軍中将・海図部長の指導のもと海軍印刷所にて製版および印刷」と記されている。副題には「最新の測量成果と地図付き」と銘打ってある。通常の本の目次に当たる部分は、「北東洋［太平洋の北部］のアトラス所収の地図、部分図、海岸眺望図の詳細」と題し、その最新情報が典拠を示す形で細かく記述されている（図2参照）[37]。日本海と黄海、および日本ならびに中国の沿岸に隣接する太平洋の一部について解説している第9項目は次のとおりである。

> IX. 北緯18度から47度まで、サンクト・ペテルブルクを起点とする東経75度から125度までの、日本海、黄海ならびに中国及び日本の沿岸に隣接する東大洋［太平洋］のメルカトール図法による地図。この地図にはトンキン湾からテルナイ［渤海？］湾(zaliv Ternai)までの中国の海岸、琉球諸島、マジク諸島(ostrova Madzhik)、バシャ諸島(ostrova Basha)［琉球以外は現在名不明］その他は、1820年発行のアロースミスの地図から採って記載；ルソン島はラペルーズ伯爵(graf Laperuz)の地図から、1820年にパナフィヂン中佐［「ポ」を「パ」としているが、この姓のヴァリエーションで、よく混同される。なお自筆署名は「ポ」。また、原文では中尉(leitenant)と表記されているが、中尉では艦長職にはつけないので、当時海軍でしばしばなされたように、海軍中佐(kapitan-leitenant)をこのように略記したものであろう］[38]によって発見されたボロジノ諸島および三丘島は、彼の観測による緯度・経度をもって確定；九州、四国および日本は近年航海者たちによって確定された最新の緯度・経度をもって1811年に海図作製部により編纂された地図より採って記載；アウストコ［宗谷？］岬(mys Austko)から松前の町までのマツシマ島［北海道］西岸は、クルゼンシュテルン海軍少将(Ivan Fedorovich Kruzanshtern)の地図より、また松前の町からシレトフ［知床？］岬(mys Siretov)まではゴロヴニン海軍准将(Vasilii Mikhailovich Golovnin)の地図から採って記載[39]。

この記述ぶりを見ても分かるとおり、サルィチェフという人物の学問的な誠実さを感じ

(37) РГАВМФ, ф. 1331, оп. 4, д. 716, л. 3.

(38) *Гринёв А.* Кто есть кто в истории Русской америки. М., 2009 の Панафидин (Понафидин) З.И. の項には海軍中佐拝命が1827年とある(С. 404)。しかし История гидрографической службы Российского флота (前注8参照). Т. 4. 1991 の当該項目(С. 262)では、「1820年の航海中に海軍中佐に昇格」とある。後者はロシア海軍の集団による記念的労作なので、こちらの説を優位とみなす。

(39) РГАВМФ, ф. 1331, оп. 4, д. 716, л. 3.



АТЛАСЪ

СѢВЕРНОЙ ЧАСТИ

ВОСТОЧНАГО ОКЕАНА,

составленъ въ Чертежной

ГОСУДАРСТВЕННАГО АДМИРАЛТЕЙСКАГО ДЕПАРТАМЕНТА

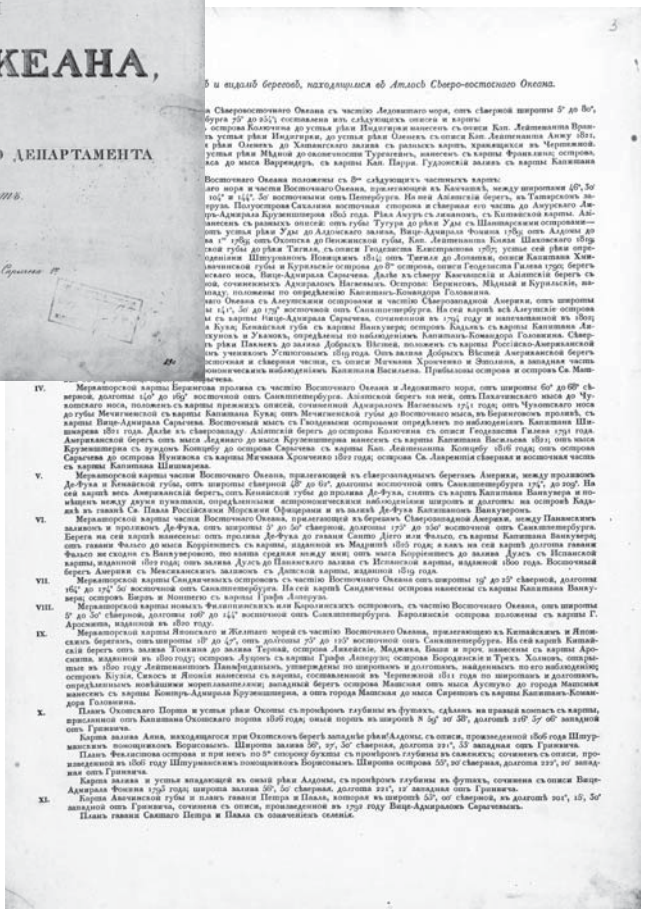
съ новѣйшихъ описей и картъ.

1826

Подъ руководствомъ Вице-Адмирала и Кавалера Сарычева 1-го

Гравировано и отпечатано при Морской Типографіи

図1



и мысовъ береговъ, находящихся въ Атласѣ Сѣверо-восточнаго Океана.

Восточнаго Океана положены съ 8 слѣдующихъ частныхъ картъ:

IV. Меркаторской карты Берингова пролива съ частію Восточнаго Океана и Ледовитаго моря, отъ широты 60° до 68° сѣверной, долготы 140° до 169° восточной отъ Санктпетербурга. Азіатскій берегъ на ней, отъ Пахачинскаго мыса до Чукотскаго носа, положенъ съ карты прежнихъ описей, сочиненной Адмираломъ Нагаевымъ 1764 года; отъ Чукотскаго носа до губы Мечигменской съ карты Капитана Кука; отъ Мечигменской губы до Восточнаго мыса, въ Беринговомъ проливѣ, съ карты Вице-Адмирала Сарычева. Восточный мысъ съ Гвоздевыми островами опредѣленъ по наблюденіямъ Капитана Шишмарева 1821 года. Далѣе къ сѣверозападу Азіатскій берегъ до острова Колючина съ описи Геодезиста Гилева 1791 года. Американскій берегъ отъ мыса Леднаго до мыса Крузенштерна нанесенъ съ карты Капитана Васильева 1821; отъ мыса Крузенштерна съ пунктомъ Конщебу до острова Сарычева съ карты Кап. Лейтенанта Коцебу 1816 года; отъ острова Сарычева до острова Нунивака съ карты Мичмана Хромченко 1821 года; острова Св. Лаврентія сѣверная и восточная часть съ карты Капитана Шишмарева.

V. Меркаторской карты части Восточнаго Океана, прилегающей къ сѣверозападнымъ берегамъ Америки, между проливомъ Де-Фука и Кенайской губы, отъ широты сѣверной 48° до 61°, долготы восточной отъ Санктпетербурга 174°, до 209°. На сей картѣ весь Американскій берегъ, отъ Кенайской губы до пролива Де-Фука, снятъ съ карты Капитана Ванкувера и помѣщенъ между двумя пунктами, опредѣленными астрономическими наблюденіями широтъ и долготы: на островѣ Кадьякѣ въ гаванѣ Св. Павла Россійскими Морскими Офицерами и въ заливѣ Де-Фука Капитаномъ Ванкувероиъ.

VI. Меркаторской карты части Восточнаго Океана, прилегающей къ берегамъ Сѣверозападной Америки, между Панамскимъ заливомъ и проливомъ Де-Фука, отъ широты 5° до 50° сѣверной, долготы 197° до 236° восточной отъ Санктпетербурга. Берега на сей картѣ нанесены: отъ пролива Де-Фука до гавани Санто Діего или Фальсо, съ карты Капитана Ванкувера; отъ гавани Фальсо до мыса Корриэнтесъ съ карты, изданной въ Мадритѣ 1810 года; а какъ на сей картѣ долгота гавани Фальсо не сходна съ Ванкуверовою, то взята средняя между ими; отъ мыса Корриэнтесъ до залива Дулсъ съ Испанской карты, изданной 1802 года; отъ залива Дулсъ до Панамскаго залива съ Испанской карты, изданной 1800 года. Восточный берегъ Америки съ Мексиканскаго залива съ Англійской карты, изданной 1819 года.

VII. Меркаторской карты Сандвичевыхъ острововъ съ частію Восточнаго Океана отъ широты 19° до 23° сѣверной, долготы 185° до 204° восточной отъ Санктпетербурга. На сей картѣ Сандвичевы острова нанесены съ карты Капитана Ванкувера; островъ Вирди и Нонпитео съ карты Графа Литеруза.

VIII. Меркаторской карты новыхъ Филиппинскихъ или Каролинскихъ острововъ, съ частію Восточнаго Океана, отъ широты 5° до 30° сѣверной, долготы 196° до 144° восточной отъ Санктпетербурга. Каролинскіе острова положены съ карты Г. Арросмита, изданной въ 1810 году.

IX. Меркаторской карты Японскаго и Желтаго морей съ частію Восточнаго Океана, прилегающаго къ Китайскимъ и Японскимъ берегамъ, отъ широты 18° до 52°, отъ долготы 232° до 159° восточной отъ Санктпетербурга. На сей картѣ Китайскій берегъ отъ залива Тонкина до залива Тернай, острова Лекейскіе, Моджика, Бошя и проч. нанесены съ карты Аросмита, изданной въ 1810 году; островъ Аухонъ съ карты Графа Литеруза; острова Бородинскіи и Тукъ Хлоповъ, опубликые въ 1810 году Лейтенантомъ Павлодинскимъ, утверждены по широтамъ и долготамъ, найденнымъ по его наблюденіямъ; островъ Кіушя, Сикоку и Японія нанесены съ карты, составленной въ Чертежной 1811 года по широтамъ и долготамъ, опредѣленнымъ новѣйшими мореплавателями; западный берегъ острова Мацмая отъ мыса Аусунзо до города Мацмая нанесенъ съ карты Контръ-Адмирала Крузенштерна, а отъ города Мацмая до мыса Сирешись съ карты Капитана Гвиадора Головнина.

X. Планъ Охотскаго Порта и устья рѣки Охоты съ промѣромъ глубины въ фунтахъ, сдѣланъ на правой компасъ съ карты, присланной отъ Капитана Охотскаго порта 1816 года; онъ порть въ широтѣ N 59° 20' 38", долготѣ 219° 57' 06" западной отъ Гринвича.

Карта залива Анна, находящагося при Охотскомъ берегѣ западнѣе рѣки Алдомы, съ описи, произведенной 1806 года Шпурманскимъ помощникомъ Борисовымъ. Широта залива 56°, 27, 30" сѣверная, долгота 231°, 33 западная отъ Гринвича.

Планъ Фелаксписова острова и при немъ по 8° сторону бухты съ промѣромъ глубины въ саженяхъ, сочиненъ съ описи, произведенной въ 1806 году Шпурманскимъ помощникомъ Борисовымъ. Широта острова 55°, 60' сѣверная, долгота 232°, 00' западная отъ Гринвича.

Карта залива и устья впадающей въ оный рѣки Алдомы, съ промѣромъ глубины въ фунтахъ, сочинена съ описи Вице-Адмирала Фомина 1785 года; широта залива 56°, 50' сѣверная, долгота 231°, 12' западная отъ Гринвича.

XI. Карта Авачинской губы и планъ гавани Петра и Павла, которая въ широтѣ 53°, 01' сѣверной, въ долготѣ 201°, 16, 30' западной отъ Гринвича, сочинена съ описи, произведенной въ 1792 году Вице-Адмираломъ Сарычевымъ.

Планъ гавани Святаго Петра и Павла съ означеніемъ селенія.

図2

させるアトラスである。念のため定規を借りて、見開きの寸法を計ってみたら、縦61.5センチメートル、横89センチメートルもあった。ロシア海軍軍人たちがリトグラフによる海図印刷技法を開発するのは1823年で、リトグラフ印刷工房は海軍印刷所に吸収される(40)。したがって、この地図は当時の最新技法によるものだったと思われる。このアトラスのЛ. 6об(41)［見開きの右頁上部に紙葉の通し番号が打ってあり、обは「裏」の略で左頁であることを意味する］（図3a（全体図）、図3b（部分拡大図）参照）にある日本とその周辺海域は船舶からの測量データに依拠したということもあって、伊能忠敬の『大日本沿海輿地全図』とは、精緻さという点でとうてい比肩できるものではない。しかし、欧米の航海者にとってはかなりの実用性があったことは確かである。両図を対照すれば興味深い問題が浮かび上がることはまちがいないが、本論考の趣旨から外れるので、ここでは参考のため島嶼関係についてのみその特徴を列挙しておきたい。

サハリン（樺太）の形は北海道に比べてわりと正しい形をしているが、a)「サハリン半島」と表記してあるように、タタール湾（サハリン西岸と沿海地方の間）の北端は閉じていて大陸とつながり、b) その北にアムール川河口から大きく広がる潟 «Лиман Амур» (Liman Amur)が描かれている、c) 千島列島は «Курильские остр:» (Kurilskie ostr:)としてほぼすべての島が島名とともに正確に記載されているが、歯舞群島には名前が付されていない、d) 太平洋の北西部の海域で、現在日本領となっている島々や、その付近にある島の名前は、i) ос. Садо (os. Sado=佐渡)、ос. Хатинжо (os. Hachinzho=八丈島)、ос. Аозима (os. Aozima=青ヶ島)、ос. Кумано (os. Kumano=クマノ島、種子島か？)、ос. Тасима (os. Tasima=長崎の鳥島？)、ос. Осьма (os. Os'ma=紀伊大島)、ос. Косима (os. Kosima=松前小島)のように日本名からそのまま借用したもの、ii) ос. Чикотан (os. Chikotan=色丹島)、ос. Кунашир (os. Kunashir=国後島)、ос.Итруп (os. Itrup=択捉島)、ос. Уруп (os. Urup=ウルップ島)、ос. Симусир (os. Simusir=シムシル島)のようにアイヌ語の地名から借用したもの、iii) ос. Кроун (os. Kroun=沖永良部島)、о-ва Бонин (o-va Bonin=小笠原諸島)、ос. Тодос лос Сантос (os. Todos los Santos=須美寿島)、ос. С. Томас (os. S. Tomas=嫺婦岩)などの、欧米系の航海者によって先に命名済みのもの、なお、最後の3島はこの地図では並び方が南北方向ではなく、かなり東西方向に傾いている、iv) ос-ва Бородинские (os-va Borodinskie=南・北大東島)、ос. Трех Холмов (os. Trekh Kholmov=鳥島)、ос. Среднева (os. Sredneva=ウシシル島)などの純ロシア的命名によるものがある。

このほかにも判型は同じくらいだが、厚みの勝る、これも立派な装丁のアトラスがあり、これにもボロジノ諸島が記載されている。表題は、海軍少将クルゼンシュテルン著『南大洋［太平洋］のアトラス (Atlas Iuzhnogo moria, sochinennyi kontr-admiralom Kruzenshternom』となっている。クルゼンシュテルンはパリ、ストックホルム、ゲッチンゲン、エジンバラな

(40) История гидрографической службы Российского флота (前注8参照). Т. 3. 1991, С. 26.
(41) РГАВМФ, ф. 1331, оп. 4, д. 716, л. 6об.


ЧАСТЬ ЛЕДОВИ
МЕРКАТОР
ВОСТОЧНАЯ
ЛЕДОВИТ
ОХОТСКОЕ
МОРЕ
АЛЕУТСКИЕ ОСТРОВ
ЧАСТЬ
КИТАЙСКАГО
ГОСУДАРСТВА
ЯПОНСКОЕ
МОРЕ
ВОС

図3a


ОХОТСКОЕ
МОРЕ
Зал. Тaтарской
Прол. Лa Перуза
КУРИЛЬСКIЕ ОСТР.
Остр. Езо или
МАТСМАЙ
Прол. Сангаръ
ЯПОНСКОЕ
МОРЕ
Корея
Прол. Корейской
ЯПОНСКIЕ ОСТРОВ
Прол. Вандимена
Ос. Бох. Лу-Чу
Формоза
В О
МОРЕ

図3b

どの科学アカデミー会員でもあることが麗々しく書かれ、この第二部(第一部は1824年刊行)は勅命によって、1826年に発行されたとうたわれている。ロシア語で書かれた頁に続いて、フランス語でもまったく同じことが書かれている。このように、西洋諸国に向けて情報発信しようとして作製されたものという印象を与える編纂スタイルになっている。日本に関係しそうな部分をとりあげるなら、No.21: 朝鮮半島および朝鮮海峡、No.22: 日本諸島図、長崎港図、No.23: 蝦夷島図、No.24: クリル諸島図、No.25: サハリン半島図などが収められている。

たしかに南・北大東島はボロジノ諸島と記載されてはいるが、I-s Borodinoと名詞形で表記されている。また三丘島[現「鳥島」]は、I. Ponafidineとなっている。クリル列島の図は他の部分に比べてより正確で、色丹島もI. Spanbergと命名されはいるが、クリル列島の一部であることを明示している(サルィチェフ版でもoc. Чикотан (os. Chikotan)をクリル列島に含めている)。サルィチェフ版には記載されていない「沖大東」がI. Rasa P. D. と明示されている(図4a(全体図)、図4b(部分拡大図)参照)[(42)]。日本全体はかなり歪んで描かれているが、とりわけ北海道のオホーツク海に面する部分がかなりデフォルメされている。サルィチェフ版も歪み具合は同じだが、クルゼンシュテルンのものと違って、上述のようにその部分を点線で書いて未測量であることを明示している。それは彼に学問的良心があった証であろう。ただ、サハリンの中央部と、本州の中央部がサルィチェフの地図より膨らみが大きく、より歪みが少ない。カムチャツカ半島東岸の海岸線も、島や湾の形がサルィチェフのものに比べて、実際に近い。琵琶湖も正しく書かれている。ところが逆に台湾の形は、クルゼンシュテルンの方が細すぎるのに対して、サルィチェフの台湾図は実際とほぼ同じである。クルゼンシュテルン版はどこで印刷したかは明記せず、サンクト・ペテルブルクを発行地とするのみである。その出来映えから見て海軍印刷所でリトグラフ印刷されたのはまちがいないのであるが。

ロシア海軍省の海図作成部局史を書いた4巻本の第3巻に主要な出来事の年表が載っている[(43)]。それによれば出版年は同じながら、あきらかにサルィチェフの仕事が先行している。クルゼンシュテルンの地図を見て、サルィチェフ海図局長はおそらく不快感を覚えたにちがいない。自分は出典としてクルゼンシュテルンの名を挙げているのに、相手はサルィチェフの業績については一言も言及しないばかりか、「勅命」の威をかりて島名までも勝手に変えたのである。クルゼンシュテルンの地図に記載された島名はサルィチェフのものとかなり異なっている。全体的に欧米起源の名称の割合が多く、日本付近の島は日本名を尊

(42) РГАВМФ, ф. 1331, оп. 4, д. 712, л. 37об. *Ивашинцов Н.А.* Русские кругосветные путешествия (前注3参照) はポナフィヂンの発見した「三丘島」をクルゼンシュテルン版のアトラスにもとづいて「ポナフィヂン島」とし、先行するサルィチェフ版は無視している。1870年代にはロシアでも、欧米に流布していたクルゼンシュテルン版のみが知られていたのであろう。

(43) История гидрографической службы Российского флота (前注8参照). Т. 3. 1991. С. 30.


Carte Générale
DE
L' OCEAN PACIFIQUE
HEMISPHÈRE BORÉAL
1827.
MER DE BERING

図4a


D' OKHOTSK
MER DU JAPON
MER JAUNE
I. FORMOSE
DE FORMOSE

図4b

重しようとする姿勢がうかがえる。だが「三丘島」を「ポナフィヂン島」に変えてしまったことには問題がある。「おのれの栄誉心におもねることなく、また航海者たちが気づきやすいよう」という、命名者の崇高で謙虚な姿勢をないがしろにする行為だからである。たしかに「三つの丘を持つ島」とフランス語に翻訳するのも、ロシア語の原音通りフランス語綴りで翻字するのも煩雑だから、名称の国際性を優先すれば、発見者に敬意を表するかたちで「ポナフィヂン島」とするほうが通りはいい。しかし19世紀初頭の航海士としての矜持を保っていたポナフィヂンは、自分の名前を発見した島につけるという不遜は持ち合わせていなかったはずである。

さて、ここで一つの疑念がわく。これほどまでに立派な地図を作成しながら、サルィチェフ海図局長はなぜボロジノ諸島の発見というポナフィヂン船長の業績を、まるで疑うかのような行為にでたのであろうか。すでに1826年に、「ボロジノ諸島および三丘島は、彼の観測による緯度・経度をもって確定」と明記し、立派なアトラスを発行しておきながら、その2年後にわざわざガゲメイステルに再確認を依頼したのである。「猜疑心」の強い性格だったのだろうか。しかし地図をよくよく眺めると、彼の学問的誠意、仕事に対する真摯な姿勢を認めざるを得なくなる。この慎重さをネガティヴにとらえては問題を見誤るのではないだろうか。あくまでも事実を追求するために、ガゲメイステルがカムチャツカへ向かうという好機を利用して「石橋をたたいて渡ろうとした」のだと考えるのが、むしろ妥当ではないだろうか。この時代の地図はまだまだ不完全である。念には念をおさなくては世界の航海者たちの命に関わる。おそらくサルィチェフはそのことを肝に銘じていたのであろう。

4. ボロジノ諸島に惹かれたプチャーチンとペリー

ガゲメイステルの世界周航に関する史料を渉猟する過程で、興味深い情報が見つかった。遣日使節プチャーチン一行を運んだあのディアナ号(Diana)が下田の津波で大破し駿河湾で1854年に沈没した。この船に乗っていたヨールキン(poruchik Iolkin)という航海士が翌1855年にニポイス島(ostrov Nipois)とイツ半島(poluostrov Ittsu)で植物を採集し、祖国に戻ってそれを帝室植物園に寄贈した。これを受けて、皇帝官房から海軍大臣官房長官あてに、内閣の方で彼に返礼として宝石付きの指輪を下賜せよと勅命のあったことを伝える文書である(44)。ここにいう「イツ半島」とは伊豆半島だろうが、「ニポイス島」というのがどの島を指すのかは分からない。開国交渉のため遠路遣日使節プチャーチンたちを運んできた船員のなかに、たまたま植物採集を趣味にする海軍軍人がいたというわけではない。当時世界周航(半周航も含め)をする艦船の乗組員たちは、水路情報だけでなく気象情報、海賊およびすれ違った船舶、その国籍や種類、航行目的の分析、飲料水、食料、燃料などの

(44) РГАВМФ, ф. 402, оп. 2, д. 240, л. 1.

調達や交易の可能性などとならんで、可能なら上陸して動物や植物の生態系をしっかり観察し記述することも彼らの任務だった。

19世紀半ばにボロジノ諸島で植物採集をしたロシア海軍関係者がいたことを伝える別の情報もある。『北大東村誌』は、「1859年ロシア海軍の練習船乗組員が大東島に上陸し植物採集を行い、その採集品はペテルスブルグの国立植物園内の博物館に保管されている。この時の採集品にボロジノニシキソウがある」と記している(45)。これは「大東島天然記念物特別調査資料」の第2章の筆者、初島住彦の「大東島の植物」にある記述からの不正確な引用である。原文は「大東島(ボロジノ島)の植物を最初に採集したのは1859年東南洋巡航の途にあった露国海軍練習船乗組の士官某で、その採集品はPetersburgの国立植物園内の博物館に収められている。ボロジノニシキソウはこの時に採られたものが基になっている」である(46)。初島が何を典拠にこれを書いたかは、引用元が示されておらず、彼があげている参考文献のうち唯一可能性のありそうな江崎龍雄編『大東島誌』(1929)にもそのことは書かれていないので、追認のしようがない。

これらの情報どおり日本で採集された植物標本がサンクト・ペテルブルクの植物園にあるかどうかを調べるためには、ロシア科学アカデミー植物学研究所にある標本室でたしかめる必要がある。もしそこに今日なおボロジノニシキソウの標本が保管されているなら、いつ、誰が、どのようにして持ってきたかも分かるはずである。そうすれば、ボロジノ諸島がポナフィヂンの測量したとおりの場所にあったことがはじめて確認されたのは、海図に記載された1826年からかぞえて何年後であったかも明らかになるのである。初島がいうように、それがはたして1859年だったのか、つまり発見から40年近くも未確認のままだったのか、物証を見つけることによって検証する以外にない。

同研究所の標本室に保管されている膨大な量の標本は、植物分類の体系に沿って整理されている。一般分類とならんで採集された地域別に、たとえば日本だけに限って区分された特別分類というのもあるらしい。しかしいずれにせよ学名や採集者名、科・属・種などの手がかりがなければ探すべき植物の標本にはたどり着けない。標本室の管理・運営をしながら研究にあたっているアリサ・グラボフスカヤ＝ボロジナ主任研究員(Alisa Grabovskaia-Borodina)の話では、ヨールキンという海軍軍人はカルル・マクシモーヴィチ(Ber Karl Maksimovich)とも関係のある、日本における植物採集ではよく知られた人物だそうである。マクシモーヴィチは1853年10月、フリゲート艦ディアナ号でクロンシュタート港から出発、リオデジャネイロを経由し西回りの航路で翌54年の7月にロシア極東のデ・カストリ湾に着いた。ここでディアナ号は、あちこちに損傷ができたパルラーダ号(Pallada)に代わって旗艦となり、プチャーチンを乗せて函館へ向かう。一方マクシモ

(45) 北大東村誌編集委員会編『北大東村誌』1986年、16-17頁。
(46) 初島住彦「2. 大東島の植物」、文化庁『大東島天然記念物特別調査報告』1973年、11-12頁。

ーヴィチは下船して沿海地方で植物の調査を始める[47]。プチャーチンの方針でパルラーダ号とディアナ号は、乗員をそっくり交替することになっていた。水兵はほとんどが入れ替わったのだが、パルラーダ号の士官でディアナ号へ移ったものは5名しかいなかった[48]。パルラーダ号は乗員総数が426名だから、士官の数も数十名にのぼったはずである。したがってヨールキンは引き続きディアナ号に残った可能性が高い。そうだとすればクロンシュタートからの長期の航海中に、マクシモーヴィチから植物採集方法を直接伝授された可能性も否定できない。

ボロジノニシキソウの標本は、学名や分類情報をたよりに、グラボフスヤ主任研究員が探し出してくれた。ペテルブルクでの調査研究に見切りを付け、モスクワにいた筆者にメールで、「G. ヴェイリフ［ロシア国籍なのでロシア式に表記する］がボロジノ島で採集したもの（日付なし）を見つけました。ドウダイグサ属(Euphorbia)とよばれたこの植物は現在chamaesyce属です。この採集についてはエミール・ブレトシュネイデル(Emil Bretschneider)［ロシア国籍なのでロシア式に表記する］にこういう言及があります」と、そのことが載っている文献を紹介し、保管されていた標本の写真も添付して送ってくれた（図5参照）。こちらの線をたどっていっても、やはり最終的にはマクシモーヴィチにつながるということが分かった。

プチャーチンは計5回にわたる長崎交渉の末、川路聖謨ら幕府側の手強い交渉相手から基本的合意にむけ前向きの回答を引き出す。「だから明るい気持ちでていくことができるのである。／その日のうちに、プチャーチン艦隊は長崎を出て行った。1854年2月5日［嘉永7年正月8日］のことである」[49]。この時の艦隊は旗艦パルラーダ号、汽走船ヴォストーク号、露米会社所有船のメンシコフ公爵号とオリヴァーツァ号の4隻からなり、かれらは約半年前の1853年7月26日［8月7日］に小笠原の父島に集結して艦隊を編成した。長崎出航後の各艦の行動は英仏との戦争の危機がせまっていたため、複雑なものとなる。「長崎を出航したプチャーチン艦隊はマニラに向かった。すでに『ヴォストーク』号は情報をつかむため、上海に出発させてあったので、艦隊は三隻であった。英仏との戦争開始が間近であり、最終的にはイムペラートル湾へ進むつもりであったが、そこはまだ冬であったし、予備物資を獲得する必要があった。マニラは中立国スペインの領地であり、さらに重要なことは、そこに信用手形が届くことになっていたのである。／2月13日、艦隊は琉球の那覇港に入った」[50]。

じつはこの時、プチャーチンはヴォストーク号を上海に行かせただけでなく、ある重要な任務を与えていた。そのことを証言するのはバルト出身のドイツ系ロシア人の生物学者

(47) 井上幸三『マクシモーヴィチと須川長之助』岩手植物の会、1981年、90頁。
(48) 和田春樹『開国：日露国境交渉』日本放送出版協会、1991年、132頁。
(49) 同書、124頁。
(50) 同書、125頁。

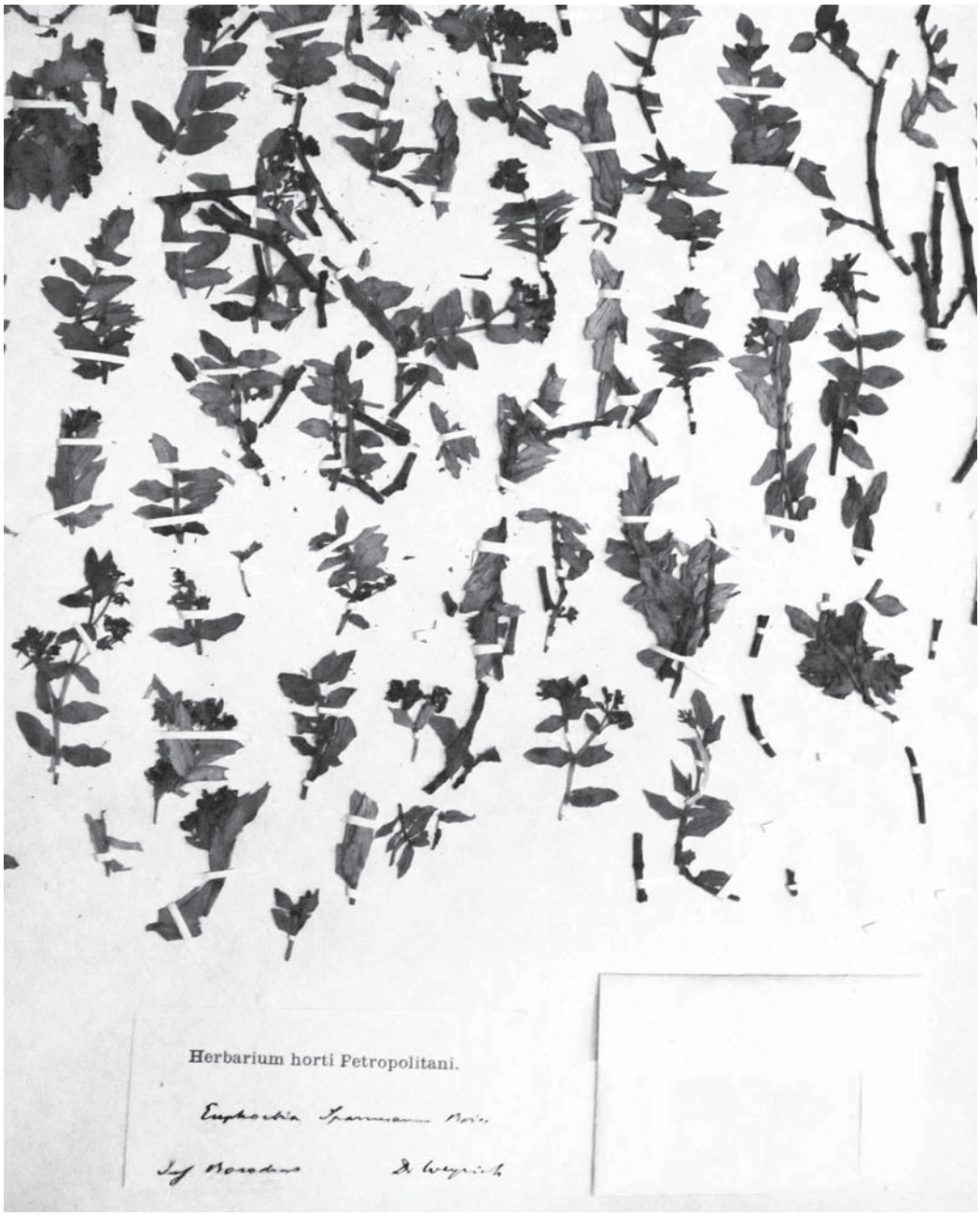


図5 ロシア連邦科学アカデミー植物学研究所に保管されている「ボロジノニシキソウ」（旧学名Euphorbia［現在名chamaesyce］Sparmanni, Bois）」の標本

ブレトシュネイデルである。かれはその代表的著書の中で、「1854年1月24日[2月5日]、[プチャーチン]艦長は、ヴォストーク号を上海に向かわせ、そこで郵便物を受け取って沖縄島まで届けるよう指令し、あとの三隻で沖縄島へむけて出帆した。ヴォストーク号が郵便物を持って戻ってくると、艦長は三隻でマニラに向けて出発、一方ヴォストーク号の方はボロジノ島という、沖縄島の東にあって、かつてポナフィヂン艦長によって発見された島を探すために派遣された。艦長は2月16日[28日]にマニラに到着し、ヴォストーク号も一週間遅れで艦隊に合流した」(51)と書いている。

「探すために派遣」というからには、この時点では未だボロジノ島の存在は再確認されていなかったということになる。はたして無事探し出せたのであろうか。同じ本の40頁ほどあとに、グラボフスカヤ氏からのメールにあったヴェイリフなる人物についても書かれており、これがバルト出身のドイツ系ロシア人の軍医であること、パルラーダ号からヴォストーク号に移って日本で植物採集を行い、それをサンクト・ペテルブルクの植物園に移植したことなどが紹介されている(52)。そしてこの本に掲載されているヴェイリフの業績一覧の中で、彼がボロジノ島に上陸してボロジノニシキソウを採集し持ち帰ったことについて、マクシモーヴィチの文献を引用するかたちで、次のように言及されている。「Maxim. Mèl: XI (1883) 831に, 1854年2月はじめヴォストーク号がボロジノ島を訪れた際(v. s. 575)、ヴェイリフが同島から持ち帰った植物、Euphorbia Sparmanni, Boiss の記録がある」と(53)。Euphorbia Sparmanni, Boissとは、まさしくボロジノニシキソウの当時の学名である。ここでいうMaxim. とはマクシモーヴィチの略、またMèl: XI (1883) 831はMèlanges Biologiques (tirés du Bulletin de L'Académie Impériale des Sciences de St.–Pètersbourg) のTome XI (1880-1883), p. 831を指している(54)。マクシモーヴィチが日本で採集された植物について発表した著書や雑誌の出版年は、60年代から80年代の長きにわたる。だがこの本のなかで「Maxim. Mèl: XI (1883)」とあるものを拾い上げてみると、いずれも沿海地方と日本で採集されたものばかりである(55)。

(51) E. Bretschneider, *Hisotory of European Botanical Discoveries in China* (London, 1898), p. 575.

(52) *Ibid*., p. 618.

(53) *Ibid*., p. 621.

(54) この雑誌の該当箇所は最近グーグル・ブックスに公開されたので引用箇所を原典と対照することが可能になった。[http://books.google.com/books?id=s3IXAAAAYAAJ&oe=UTF-8] (2011年7月13日閲覧). これによると1883年5月10［22］日の日付のある623頁からはDiagnosses plantarum novarum asiaticarum, V. Scripsit C. J. Maximowicz という表題のもとで、マクシモーヴィチによってアジアにおける一連の新発見植物の記述がなされている。831頁にはたしかにボロジノニシキソウのことが次のように記述されている。"2. E. Sparrmanni Boiss. Cent. Euphorb. 5. Benth. Fl. Austral. VI, 46. *E. ramosissima* Boiss. in DC. Prodr. I. c. 14., nec Hook. Arn./ In insula *Borodino* (ab archipel. *Liu-kiu* orientem versus), in saxis nudis littoris, med. Febr. 1854 fl. frf. leg. b. Dr. Weyrich. Tum in *Mariannis*, Australia: New South Wales, Howe's island, *Pitcairn.* Sparrmanni in insulis ad orientem Indiae invenisse dicitur."

(55) ブレトシュネイデルのリストにある12種はすべてアムールや日本で採取された植物ばかりである。Bretschneider, History (前注51参照), pp. 585-562.

くだんのヨールキンについても、ブレトシュネイデルは次のように紹介している。「ヨールキン・ピョートル[マクシモーヴィチはドイツ風にJolkinと書く]。ディアナ号に乗船した海軍士官。サンクト・ペテルブルクの植物園の標本の中には、ヨールキンが1854年と55年に主に下田近辺で採集し、日本から持ち帰ったものが619種ある。同じくActa Hti Petrop. II, 250参照」(56)。マクシモーヴィチがはじめて日本を訪れるのは1860年9月であるから、ヨールキンと日本で行動を共にしたことはないだろうが、二人の間に学問をつうじての緊密なつきあいがあったことは、このかっこ内の注記からもうかがえる。

さて、プチャーチン艦隊の3隻は1854年2月1［13］日マニラからふたたび沖縄島にもどり那覇港に投錨する。ヴォストーク号はその機動性を生かして上海で情報集めをしたのち、4日遅れて那覇港で合流する。ロシア艦隊の乗務員たちは、ロシアと英仏の戦争がいつ始まるか緊張した日々を送っていた。ヴォストーク号はまだ宣戦布告はなされていないという情報を持ち帰った。和田春樹は、「そこで21日艦隊はマニラに向かった。実はこの日ついにロシアは英仏に宣戦布告をしていたのである。／マニラに到着したのは3月1日である。そこには上海にいたフランスの汽走軍艦『コルベール』がいた。もちろん戦争がはじまったことは知られていない。プチャーチンは『コルベール』の艦長を儀礼訪問したが、さすがに緊張を禁じえない。スペインから着任したばかりのフィリピン総督は、冷たい応対で、プチャーチン艦隊が招かれざる客であることをさとらしめた」(57)と、日露国境交渉の長い過程における、とくに1854年の2月から3月にかけての開戦前後の時期の、プチャーチンの心の内を思い描いている。おそらくそれは正しいであろう。だがこの緊迫した心理状況において、かれは情報収集には欠かせない重要な汽走船ヴォストーク号を、あえてボロジノ島の探索に向かわせたのである。それほど彼を惹きつけずにはおかなかった何かを、ポナフィヂンが発見した二つの島は持っていたと言うことになる。

ほぼ同じ時期、同じ任務をおびてアメリカ合衆国から日本にやってきて、徳川幕府から条約締結をとりつけるべくプチャーチンと競い合っていたペリーも、なぜかボロジノ諸島にはこだわりをもっていた。彼は『日本遠征日記』でこの二つの島をわざわざ確認しに行った時のことを、くわしく書き留めている。「こうしてディサポイントメント島すなわちロザリオ島の位置を確認できたので、こんどは琉球に戻るついでにボロディノス群島を見たくなった。そこで、海図の記載にもとづいて、この島々にまっすぐ船を向けるように命じた。／6月22日、真正面に島影を認めた。近づいてみると、二つの島が5マイルほど離れて北北東から南南西方向に並んでいるのがわかった。この二つは珊瑚島のようだが、高所にかなりの大木が生えているところを見ると、非常に古くできたものらしい。最も高い部分は海抜40フィートほどだろう。周囲の海には障害物はなさそうだった

(56) *Ibid*., p.621.
(57) 和田『開国』(前注47参照)、126頁。

が、海岸線に適当な湾入がなく、安全に錨泊できそうな場所が見つからなかった。／人の住んでいる気配はなく、どちらも無人島と思われる。推計だが、南側の島は北緯25度47分、東経131度19分だった」[58]。航海者は一様に未知の島に惹かれるようである。しかし、歴史上名高いこの二人の人物が同じ時にボロジノ諸島に魅せられたという不思議を、たんに大洋を航行する者の共通の心理だという説明で済ませることはできるだろうか。

二人は航海者であるだけでなく軍人でもある。「ボロジノ」が、あのナポレオンの運命を決定的に変えるきっかけになった決戦と密接に関係する地名であることは、知りすぎるほど知っていたにちがいない。だからこそ「ボロジノ」という名前そのものが彼らを引き寄せたと考えるべきであろう。もしもポナフィヂンが30数年前に「ボロジノ諸島」ではなく、なにか普通の命名をしていたなら、二人が熾烈な競い合いをして鎖国の日本を相手に困難な外交交渉をやっている最中に無理を押してまで、たかが無人島の存在を確認するために、はたして貴重な時間を割いたであろうか。

まとめ

ここでボロジノ諸島発見とその存在確認に関わったアクターたちのメンタリティを振り返ってみよう。そこには境界で区切られた空間を脱して無境界空間に入った人たち特有の一連の特徴が認められる。

ポナフィヂン艦長は伊豆・小笠原海溝の近くにある鳥島を発見し、報告書に「この発見によって全聖人島と聖フォマー島の存在意義が損なわれることのないよう、またおのれの栄誉心におもねることなく、さらには航海者たちが気づきやすいよう、私はこの島を三丘島と名付けました」と書いている。彼には、二つの島を発見した先人にたいする敬意と、自分のこのたびの発見でそれらの島への注目度が下がるのではないかという気遣があった。つぎに、発見した島の命名権を持ちながら、自分の虚栄心がその名前に刻印されてはならないという自制心があった。そこで、このあたりを航海する人たちが島影を見てすぐにそれと分かるよう、島のかたちの特徴をそのまま島名にしたのである。ボロジノ諸島を発見したときも、「島の形そのものからして航海者にはなんら有益なものはもたらしそうもなかったため、付近に留まることはいたしませんでした」とか「水を確保できない島だと判断できることもあって、なんら益するところはないと考え」と、大海原を航海する人々すべての利益の観点から、自分のとるべき行動を判断している。

おそらくこういう倫理観はこの時代の航海者たちすべてに共通するものであっただろう。海図にない島を見つけたとしても、それは発見者が、あるいは彼の所属する国が他者を排する独占権の主張につながるものではなかった。世界はまだあまりにも広く、発見し

(58) M. C. ペリー、木原悦子訳『ペリー提督日本遠征日記』小学館、1996年、40頁。

た土地にそのつど領有権を確立していく余裕などなかった。そんなことには無頓着に、彼らはそれが万人に(ときには当面の敵にさえ)ひとしく利益を供与する、いわば「海の入会地」であると見なしていたのである。果てしない海洋を船で行くものにとって、飲料水や燃料、食料の調達は何よりも大切である。だからそれらを調達できる可能性のある島を独り占めするという発想は持ちえなかった。これは漁師たちの場合も同じである。海が時化たときに一時避難をする場所として、ある決まった無人島に上陸することがあったし、漁具や漁網の予備をそういうところに置いておくこともまれではなかった。かといってそのことによってただちに、その島が特定の漁師たちの占有する土地であるとか、かれらの属する国の領土であると見なされたわけではない。

正確な海図を作成することも、発見者の属する国の領有権を主張するためではなかった。最新の海図はすべての国々の共有財産であったし、いまでもそうであろう。皇帝陛下直属海軍省海図局長のサルィチェフにしても、彼の職業的、専門的誠意はなにもロシア帝国、あるいはロシア皇帝陛下への忠誠心から出たものではなかった。かれの自負心は海洋大国の大英帝国が英国海軍海図にロシア人の発見した島々を記載したことで十分満足させられたはずである。反対に、だからこそ彼は自信を持って作製した最新のアトラスに、国籍にかかわりなく、水路関係の情報提供者の名前を明記し、地図中の細部についてひとつひとつ典拠を示すのにやぶさかではなかったのである。今日、領土問題の係争の中でどちらが先に正確な地図を作成したかが、領有権の証であるかのような主張をしばしば見かける。しかしそれは歴史的な事情をわきまえない、無意味な「証拠」探しと言わざるをえない。現にロシア帝国の海軍関係者が最初に発見した島々のうち、その後ロシア領に編入されなかったものはかなりの数に上る。南・北大東島の事例に見るように、日本による領有宣言にたいしてロシア帝国政府は異議申し立てをしなかった。ほかの島々についても、おそらくは係争問題にならず、ロシア以外の国々の領土に帰属したものと考えられる。

プチャーチンがヴォストーク号をわざわざボロジノ諸島に派遣して、命がけでなければ上陸できない島で植物採集を行わせたのも、将来の領有権主張のための布石などではなかった。彼は一航海者として、また一海軍軍人として、純粋な好奇心・関心に突き動かされたのである。この点ではペリー提督もまったく同じである。地図に記載はあるが、その後誰も訪れた形跡のない島々は、彼にとっておおいに興味をそそられる存在であったに過ぎない。

この時期の太平洋の島々の中で、クリル諸島(千島列島)は、これとは少し違った存在になっていた。露米会社はアラスカだけでなく、アレウト諸島とクリル諸島にも植民地を広げ、択捉島のすぐ北隣のウルップ島には1828年にその支部の基地が置かれた。先住民のアイヌや、ラッコ猟の担い手として連れてこられたアレウトたちの正教徒化をはかるため

に、教会を建てて神父を派遣させ常駐させる手はずも行っている[59]。また、日本人がウルップ島へ来たさいの対処法についても本部から指令を出している[60]。クリル諸島のロシア植民地化は着実に進み、ウルップ島はまさにその前進基地となっていた。一方日本の方はどうであったかというと、1806年、フヴォストフ(Nikolai Aleksandrovich Khvostov)とダヴィドフ(Gavril Ivanovich Davydov)らが択捉島の、日本人が住む集落や南部藩や津軽藩の藩士たちが勤番する施設を襲撃し、略奪、焼き討ちをしたことでも分かるとおり、幕府の「実効支配」はある程度進んでいたと見てよいだろう。太平洋に面するこの地域はまさに、境界なき空間の終末期を迎えていたのである。ただし樺太はこれとは多少状況が異なり、日本人が漁をするための番屋があって、米、味噌、酒など備蓄もあったが、松前藩からの役人は漁期が終わると帰ったようである。1853年10月にニコライ皇帝の命令で、露米会社のサハリン遠征隊を率いるネヴェリスコイ(Gennadii Ivanovich Nevel'skoi)がクシュコタンに上陸し、日本人の部落の中に砦を作ろうとする。和田春樹によれば、このとき「ネヴェリスコイは日本人の番人を船に招き、サハリンはロシアの領土である。日本人の営業は妨げない。むしろそれを保護するために哨所をつくるのだと説明した文書を渡している。ネヴェリスコイは砲台が完成したところで、これをムラヴィヨフ哨所と名付けて、8日ペトロフスクへの帰途についた」ということである[61]。もしその時本当にロシアによるサハリンの領有が確立していたなら、1855年に調印された日魯通好条約での樺太条項は別のかたちになっていたにちがいない。しかし実際にはロシアによる砦の建設など、サハリンの日本人たちにとっては何の不都合もなかった。ロシアも日本も、樺太を決定的に支配しているという実態はなかったのである。だから条約には1855年時点での千島(クリル)・樺太(サハリン)での、境界がグラデーションをなしていた時期における空間の特徴ある関係がそのまま反映されているのである。

それから12年が経ち、1867年にアラスカがアメリカ合衆国に売却されると、半世紀以上続いていたクロンシュタートからの世界周航も止まってしまう。1855年に正式にロシア帝国領土となったウルップ島以北のクリル諸島への食料品、生活必需品などの物資の運搬は、ペトロパヴロフスク港かオホーツク港からしか届かなくなったわけである。しかしこれらの土地は、おそらくその当時も慢性的食料難にあえいでいたはずである。千島列島の植民地は、毛皮資源の枯渇もあって、もはや経営が不可能な状態に陥っていたと見るべきであろう。さらに8年を経た1875年、樺太千島交換条約の批准書が東京で交換されるが、ロシア側の事情からすればクリル諸島は、領有し続け、管理・経営を維持していくにはもはや限界に達していたということである。ちょうどアラスカがそうであったように。そし

(59) РГАВМФ, ф. 1375, оп. 1, д. 8, л. 299.
(60) РГАВМФ, ф. 1375, оп. 1, д. 32, л. 204.
(61) 和田『開国』(前注48参照)、106−107頁。

てこの時まさに、日本とロシアの間における境界の曖昧な空間は消滅したのである。そしてそれは同時に、日清、日露戦争から第二次世界大戦終結とそれに続く冷戦期をへて今日に至る百数十年間の、日露が国境問題というアポリアをともに抱え込んでしまった「病んだ時代」の始まりともなった。